

青江舜二郎編

未来一幕劇シリーズ 8

青年演劇一幕劇集

【第一集】

未来社刊

青江舜二郎編

青年演劇一幕劇集【第1集】

未来一幕劇シリーズ 8 未来社刊

本書に収録作品の無断上演を禁じます
上演の際は必ず未来社にご連絡下さい

青年演劇一幕劇集(第一集)

【未来一幕劇シリーズ 8】

一九五九年一月二〇日 第一刷発行
一九七六年三月二〇日 第六刷発行

定価 五五〇円

編者 青江舜二郎

発行者 西谷能雄

発行所 株式会社 未来社

東京都文京区小石川三―七―二
振替・東京 七―八七三八五番
電話代表 〇三(八二四)五五二一番

本文印刷 光陽印刷

装本印刷 形成社

製 本 五十嵐製本

(落丁・乱丁本はおとりかえします)

青年演劇一幕劇集 第一集 目次

窓……………青田 章……………三

ある午後……………岡野奈保美……………四

明日という日を——…葱花 勲……………五

罷業の後に……………鈴木三津子……………二九

山の歌……………丸山幸男……………四三

編集を終えて……………青江舜二郎……………一七三

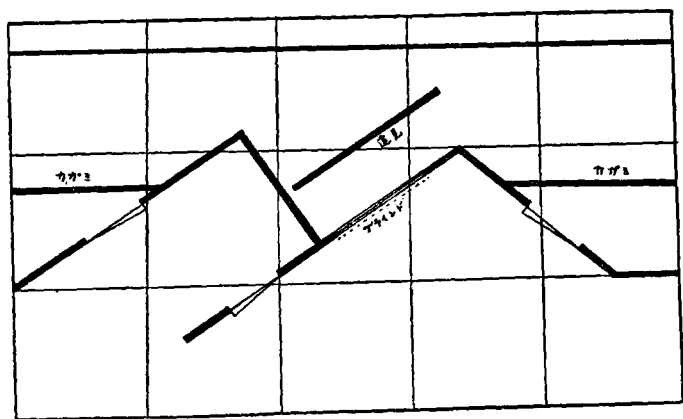
装置図 金子国義

窓

青

田

章



キ ャ ス ト	
課長 高木 (五十歳位)	
社員 浜本 (三十四、五歳)	
〃 木田 (二十二、三歳)	
〃 A (二十一、二歳)	
事務員 有坂純子(十九歳位)	
〃 江森啓子(二十四、五歳)	
〃 大森康子(二十四、五歳)	
〃 川口芳枝(二十二、三歳)	
〃 梶谷カツ子(五十歳位)	
〃 チ ャ コ(二十一、二歳)	
その他女事務員一々二名	
下請会社々員 後藤(五十歳位)	

時 現代 十月下旬

所 東京都内ビル街の一室

1

オフィスの内部、舞台一面に事務机六つ。中央上手寄りに正面を向いてひととき大きなデスク。上役の席らしい。その席を残して事務員四名執務中である。時刻は午前十時頃、下手のドアは廊下に通じている。上手にもドアあり他の部屋に通ずる。正面の室は床より天井まで大きな窓。戸外にビルが立ちならんでいるが、窓にはブラインドが適當の高さで下りているため全部は見えない。

街の騒音 F.1 ↓ up タイプやソロバンの音等と W って……。

純子のナラタージュ (以下 N と省略) 私、有坂純子。……今年の春高校を卒業したばかり。秋になってこの会社採用されて今人事課でこの課長さんに引合わされた。……私の隣りに立っている人は木田一夫さん。呑気そうに見える大学卒業の方……。私意気地がないのかしら。……ドキドキして苦しい位。……純子、しっかりして……。ア、課長さんが今ドアに手を掛けたワ。サア私の職場……。皆が振返って見るに違いないゾ……。新入生ですもの……。

上手ドアよりまず課長現れ、木田、有坂の順で立つが誰も振返る者はいない。課長席につくか

つかぬうちに下手卓上の電話のベル鳴り、川口芳枝取り上げて応対する。

芳枝

ハイ。こちら中西セメント生産第一課でございます。毎度有難う存じます。……ハイ。ちょっとお待ち下さいませ。かわります。浜本さん……旭電化の後藤さんから……。

浜本ノッソリ立つ。技術屋らしい無頓着さがある。

浜本

ア、モシモシ、浜本です。……フム、困るなあ今頃。納期は三日後ですがいいんですか？……エ、ウン……ウン、だがね、そんな……理由にならんじやないですか、アレ程……エ……フン……いやすぐきてください。課長に話して貰いましょう、とにかく。

純子目を見張ってこの動きを追う。課長椅子に納ってヤオラ紙片を読みつつ、

課 純 課
長 子 長

木田君は法科でしたナ。有坂さんは高校の普通科……普通科って何です？

職業課程に対して普通課程です。大学の教養課程と同じです。

長 なるほど……木田君は浜本君の向い……ア、チョット浜本君……木田一夫君だ。今度原価計算の方をやって貰うんでネ、今人事課から配置が決定してきたばかりなんだ。……それから有坂さんは江森

さん……君もちよつと。……この人の向いのあの席ネ……江森さん、有坂純子君だ。生産伝票の方を教えて上げて下さい。……（木田と純子に向って）人事課長から色々注意は受けたと思うがね、ここみたいな生産業では何といつても生産課の任務は大きい訳だよ、君達も一つその積りで大いに張切ってやっ

て貰いたいネ……。

課長の机の電話鳴る。

課長 ハイ……ハッ、社長で！　すぐ参ります。……僕はちよつと社長室へ行くからネ、浜本君と江森さん、当座の仕事を……ウン頼むヨ……。

課長 アタフタと上手ドアより去る。

浜本 （木田に向つて）君、ここだ。

江森啓子 （純子に近づきデスクに案内する）

浜本 半年は現場で見習やっただらう？　原価計算の要領はわかつてるネ……資料は昨日揃えといったから……早速コイツを頼もうか……。

啓子 この青い伝票ネ、隣りの生産二課から廻ってきますから、この帳簿に……エ、そうなの、それでト……これが日計表なの、これに整理して行けばいいの、それだけよ、後は計算機がしてくれるから……。

課長上手より帰つてきて椅子に。

課長 有坂君ちよつと、木田君は卒業して半年でも見習をやっているからまあいいが……君は新採用もホヤホヤだからネ、前いた人がこんど急に結婚してネ、どうも近頃の人は後の迷惑も考えないんで困る

よ、いきなりやめますって言うんでネ、マアしかし君にはそれが良かったわけかな、ハッハッハッハッ。

後藤 ちょうどこの時入ってくる。何か卑屈な様子。

後藤 先程はどうも……。

課長 ヤア。

課長 彼の顔を見て何か思い出した風。机上の書類を何やら調べる。後藤 浜本に近づきペコペコする。

純子のN マア、おじさんだワ、お家の時と違って見すばらしいみたい……気がついてくれないといいけど、こんなところで恥しいワ。

課長 とにかく仕事のケジメだけはキチンとつけてくれたまえヨ。

浜本 お話中ですが旭電化からまたㄇㄣの納入が遅れるってきてるんですが……。

課長 ヤア、後藤君、どうしたんだね、まあきたまえ。(純子に) もういいヨ。(後藤に) 困るじゃないか、設計に無理でもあったのかネ。

後藤 申し訳ありません。そんな訳じゃないんですが……何しろすっかり材料不足でして、その手当にヒマを喰ってしまってます。

課長 仕様がないネ、ゼンタイ、いつ納めるんかネ。

後藤 三日はちよっと……一週間いただけましたら必ず……ハイ。

課長

フーム、しかしできんものは仕方ないやネ、一週間で必ず納めるかね。

後藤

そりやもう……ハア。

課長

じゃ向うで書類にして行き給え。

後藤

相済みません。

後藤かしこまって立去る。浜本憎々しそうに見送って、

浜本

仕様がないですな課長、あんなボロ会社に発注するの止したらいかがです。すぐ泣きごとだ。

課長

中小企業は火の車だからナ、マ、暫く待ってやろうや。

浜本

契約は契約ですからナア。今度納まらなかったら違約金をビシビシ取り立てるんですナ。甘やか

したらキリがありませんからネ。

純子、浜本の剣幕が激しいのでびっくりして見上げるがまた仕事に戻る。（間）遠方で十二時

のサイレンこもごもきこえる。浜本乱暴にペンを投げだすとサッサと下手よりでて行く。課長

チラリと見るが無感動に自分も立って上手より退場。

啓子

例によって浜本さんドライだわ……有坂さんお弁当持ってる？

純子

エエ。

啓子

私も、ジャお茶取ってくるワ。

純子

私がいしますワ。

啓子 済みませんワネ、それじゃ……廊下の端に温沸所があるの、ヒーターに掛けといたらすぐよ、食堂もあるけど不経済ですものネ。

純子 廊下にでる。下手から後藤現われる。

後藤 純子じゃないか。

純子 おじさんまだ御用？

後藤 エッ……それじゃお前さっきの生産課にいたのかい？ お前がこの会社に就職したことは聞いて

いたが……そうか。

純子 サッキは辛かったワ、おじさんたらペコペコして……。

後藤 そりゃ仕様がないう、ウチの会社のいいお得意なんだから……。待てヨ……そうだ、川口さんて

女の人もいるだろう？

純子 サア、まだハッキリは知らないんだけど……私の向いの方かしら？

後藤 そうだろう……その人に頼むつもりでいたんだが……どうだろう、これ、今日中に課長さんの机の引出しにソツと入れといてくれないかネ。

純子 引出しに？ 何なのソレ、今さっき渡せばよかったのに……。

後藤 イヤ、そうもゆかんのでね……。ワシだって、こんなことしたくもないんだが……実はネ、おじさんとこの会社ツブレそうなんだ。

純子 まあ、ホント、それ？

後藤 ウン、それやこれやでサッキの……聞いてたと思うが、あの注文の機械さえ、うまく納まればま

た息を吹き返す訳なんだ。……それでウチの社長がこの際無理をしてもって言うんで……非常手段なんだがぜひ生産課のO・Kをとらんと……これだけあれば、ワシの二月分の遅配になっている給料を何とかしてくれたらと思うんだが……。お前を使って済まないが、幸いまだ親類同士って事もわかってないし、一つ助けると思つて……。

純子 ジャこれ……お金なのネ……。

後藤 マ、早く言えばネ。

純子 ジャ、ワイロじゃなくつて？ 私、嫌よ。

後藤 そりゃナ、しかしこれでウチの会社が建て直せば二百人の従業員と家族がチリヂリにならずに済むんだ、どうだ、やってくれんか？ もうけの上にももうけようっていうのと訳が違うんだから……。

純子 だって……新聞に汚職だなんだって……

後藤 コレ、お役所じゃなし、そんなに固苦しく考えなくとも良いんだよ、それにおばさんや、ウチの子供達のことと考えておくれ、三郎も来年卒業だというのに、今度もトウトウ修学旅行にも出してやれそうにもない始末でなあ……。

純子 しばし無言、ややあつて、

純子 そう、じゃ……。

後藤 悪いことを教えて、本当に済まんがたのむ……この通りだ。

純子 いいのヨ……仕方ないワ。

後藤 本当に済まんナ、お父さんにも内緒にしておいておくれ……だがお前も入社そうそうだから、

かえって気がつかれないヨ……。

純子 (激しく) もう止して、早く帰って頂戴。

後藤 ……。 (うなだれて去る)

純子のN こんなことを引受けてしまった。世間ってどうしてこうなんだろう。でも断れなかった。高校の時には夢にも考えなかったことだし、睡でもかけてやりたいことだったのに……それが今！

課長下手より現われる。純子気がついたトタン、うろたえて封筒を落すがあわてて拾って下手へ、課長純子の様子に不審そうな目を向けるがそのまま行き過ぎ、向いの第二課の部屋に入る。

啓子 現場ではどうでしたの？

木田 ハ？ ウドンですか？

啓子 マア、フ……何ですの、ウドンって。

木田 イヤ、現場では食堂でウドンばかり食ってたんで、ついその味を思い出してたもんですから。

一同笑う。純子帰って皆にお茶を配る仕度。他の女子事務員芳枝、康子のうち、芳枝は純子に手伝う。康子デスクより立上つてきながら、

康子 先程はどうも、大森康子と申します。よろしく。

木田 僕こそ、馳け出しで何にもわかりませんから。

啓子 ア、この川口芳枝さん、去年お入りになったの。

木田、川口、たがいに挨拶を交す。

芳枝 川口です、どうぞよろしく。

木田 僕こそ何分よろしく。

康子 工場の方とくらべて、こちらはどんな工場ですの。

木田 やはり事務屋さんはきれいですね。でも機械の音を聞けないんで静かすぎて。

康子 現場の方がお好きらしいわね。

木田 初めはオヤオヤと思いましたが、セメントを作る機械なんて、どんなものか知らなかったんですからね。

啓子 私達だって、入社して一年位は全然知らなかったワ。

康子 見学旅行でやっとわかった始末ね。

木田 性格にもよるんですが、工場の方は活気があって……珍しさもあるかも知れませんがね。

この間、純子課長のデスクに封筒をソツと入れる。芳枝とともにそれぞれお茶を配り自席に戻って食事を始める。

康子 お弁当済ましちやいましょうヨ。

女子職員二名下手より雑談しながら登場、課長二課よりでてくる。両名黙礼して二課へ、入れ違いに課長一課へ入ってくる。机に行つてライターを探るうち封筒を見つけて小首を傾け、違